岐蘇林檎

御本典記念號

御大典奉祝唱歌

一、天地のむたきはみなき天津日嗣
の御位にわが天君ののぼります
今日の御典の尊さよ

二、垂穂の稻の大御饌に白酒黒酒を
取りそへて皇御神にさゝげます
大御祭のかしこさよ

三、大き正しき君が代の大御祝に外
國のつかはし人も列りて共にこ
とほぐめでたさよ

本誌目次

謹奉祝御大典、賀詞

▲研究

御大禮の法制と淵源
腕扱入會の消滅と其影響
製材場經營法

▲文苑

御大典に就て
脱面錄
小品三篇
我自身を知れ
秋三篇
强く生きよ
秋のグリーフ
汝自身を恃め
美しき空へ
我木曾山林學校
林業家として渡鮮せんとする人に
奉祝歌、俳句

▲通信、冗語

學校便り、會員消息

謹奉祝御大典

御製

夜駕艟艨過遠洲　藩天明月思悠々
何時能遂平生志　一躍雄飛五大洲

瑞雲靉靆として天空に懸り祥氣磅礴として地に滿ち山は既に錦を纏ひ菊花爛熳たる此月を以て畏くも

今上天皇陛下　京都に於て御即位の大禮及大嘗祭を行はせ給ふ　吾人幸にして斯の金甌無缺の國土に生を享け斯の昌平の御代に遭遇し而かも斯の曠古の盛典を奉祝するの光榮を得誰か誠歡誠喜せざらむ　恭しく惟ふに

允文允武なる　今上天皇陛下　夙に列聖の洪謨を紹き先帝の鴻業を宏恢し給ひてより茲に四星霜、而して昨年八月歐洲大動亂突發するや帝國も亦た同盟の公義により遂に干戈を執りて立ち一擊忽ち青島を陷れ彼の勢力を東洋はたゝか南洋よりも驅逐し東亞の平和を確保し未だ全く干戈を戢むるに至らずと雖皇威遠く海外に及び國運の隆昌實に振古其比を見ず是れ此の時に當り御代の初に行はせらる御一代唯一度の大禮にして實に我國至重至嚴の盛典を擧行せらる吾人滿腔の赤誠を以て之れを奉祝すると共に宇内の大勢に鑑み朝見御式に於ける詔書の聖旨を奉體し和衷協同各其本分を盡し夙夜淬礪邦家の爲め益奮勵努力し以て一躍五大洲に雄飛するの覺悟なかるべからず茲に五百有餘名の會員諸君と共に御大典を奉祝し虔みて聖壽の無窮を祈り奉る

大正四年十一月六日東京御發輦の日

七宮純雄

講誌

賀詞

維時大正四年十一月十日　今上天皇陛下御即位の大典を擧させられ新に天つ日嗣を繼がせ給ひし事を上皇祖皇宗に告げ給ひ下天下萬民に宣り給ふ吾等此聖代に生れて此盛儀に遭ひ奉る何の辭を以てか克く聖明を壽し奉らん恭しく惟みるに鴻荒の世天孫始めて此土に降臨せさせ給ひし時天祖勅して宣はく豐葦原の瑞穗の國は吾が子孫の王たるべき地なり汝皇孫就きて治めよ寶祚の隆なる事當に天壤と窮なかるべしと神勅一度出でゝ炳として日星の如く天つ日嗣の御位は萬古に確立し皇統連綿として涯なく皇基益々鞏く皇祚愈々昌に神武以還代を累ぬる事茲に二百二十有二歲を閱すること實に二千五百七十又五而して畏くも今日の當り神勅の實現を見奉る嗚呼偉なる哉崇なる哉

俯して惟みるに　今上天皇陛下允に文允に武明治の聖世を繼ぎて更に天業を恢弘し給

ひ皇威八紘に輝き王化四表に被り國運の隆版圖の大振古未だ曾て有らざる所即ち今回の御大典たる眞に曠古稀世の大典と稱し奉るべし嗚呼此盛世に生れて此無前の大典に遭ひ奉る誰か誠歡誠喜して聖壽の無窮を禱り奉り皇國の隆昌を賀せざるものあらんや抑々我國体の尊嚴なる宇内に其比を見ざる所而して君臣の義は父子の親を兼ね歴代の聖主治を敷き民を撫し仁澤雨露の如く下り奕葉の臣民亦克く誠を盡し敬を竭し上下穆々三千年金甌無缺の國体の美は此に涵養せられ此に育成せられたり畏くも　今上陛下睿明前聖に軼ぎ給ひ祖宗の遺訓を奉じ益々精を勵まし治を圖り給へば其惠に浴し其化を被るもの將に測られざらんとす冀くは吾等終天極地陛下の治下に居り至治を欣び盛世を謳ひ奉ることを得んゝて皇國の歴史を案ずるに常に進化發展の跡を示さゝるはなし就中明治以來百事一新國勢頓に進み遂に雄を東亞に稱し轡を列强と並べて馳驅するに至る亦盛なりと云ふべし而して今や西歐の干戈結んで解けず漢土の風雲亦轉々暗澹たり此時に當りて皇國の臣民たるもの豈深く皇國の歴史を顧み皇國の使命を自覺し協同一和以て國運の發展に努め皇猷の翼成を圖り益々我が國体の美を發揮宣揚せずして可ならんや玆に無前の盛典に當り吾等欣躍抃舞の至りに堪へず聊か卑衷を述べ虔みて聖壽の無疆を禱り奉る。（竹軒生）

研究

御大禮の法制と淵源

宮川丑作

明治天皇俄に神去り給ひ、上下悲歎の涙にくれしも、日嗣の皇子は直に御位に登り給ひ天日は毫も光を改めずして四海に赫々たり、然も普天の下悲みの雲に閉されて、世は暫く諒闇となりしが、何時しか雲はれて再び天日を仰ぐに至り、近く御大禮を行はせらるゝ事となり、萬歳の歡呼に地軸も爲に動搖めくに至り、我等微臣に至る迄亦饗饌を賜はるの光榮を拜するに至りぬ、誠に盛世の賜千載の一遇と云ふ可なり。謹みて按ずるに、大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治し給ふ御掟にて、國家は皇位と其運命を共にす可く、皇位は又天壤と共に極まりなかる可きなり、然も自然人たる天皇は寶算の無窮を期す可からず、茲に於て皇位繼承の御事あり、天皇崩御すれば繼承の資格を有し順位に當るもの、當然直に皇位を充たし、其間瞬時も曠缺する所なきも、法諺に君主は死せずとは此謂なり。帝國憲法第一條に曰く

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

皇室典範第十條に曰く

天皇崩ズルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

今上天皇陛下の御勅語に

朕俄ニ大喪ニ遭ヒ哀痛極リ罔シ但タ皇位一日モ曠クスヘカラス國政須臾モ廢スヘカラザルヲ以テ朕ハ玆ニ踐祚ノ式ヲ行ヘリ（下略）

斯くて皇位繼承の御事は踐祚に依て完成すと雖、更に之を上祖宗に告げ下内外に宣する御儀式なかる可からず、即位の禮と大嘗祭とを合せたる大禮の御儀即ち是なり

皇室典範第十八條に曰く

諒闇中ハ即位ノ禮及大嘗祭ヲ行ハズ

登極令第四條に曰く

即位ノ禮及大嘗祭ハ秋冬ノ間ニ於テ之ヲ行フ

大嘗祭ハ即位ノ禮ヲ訖リタル後續テ之ヲ行フ

皇室典範第十一條に曰く

即位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

斯く大禮の御儀は、皇室典範並に登極令に依て定められたる者にして、明治の御代に至て制定せられたる者なれば、其形に於ては所謂古式と異なる所あるべきも、其淵源は遠く神代に在り、其精神は開闢以來渝ること無きなり

即位の禮は賢所大前の儀と紫宸殿の儀とに別る、賢所大前の儀は賢所を祀り神器を承けさせられし事を祖宗に告げ參らす御儀式

紫宸殿の儀は皇位に登り給へることを下萬民に語げ又外國にも知らしめ給ふ御儀式にして、共に天皇御一代唯一度の御事なれば誠に皇室至高の大典たると共に、邦家至上の盛儀なりと云ふ可きなり

大嘗祭も亦悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀とに別るゝも共に、卜定の法に由り定められたる、東西兩地方の齋田にて作られたる新穀にて造りたる御饌、神酒其他の神饌を供し給ひ、陛下親からも夫れを聞し召すと共に、更に引續いて百官群臣にも大饗を給はる御儀式にして、誠に報本反始の御趣旨、庶民安穩、國土豐饒を祈念し給ふに在り

御大禮
- 即位の禮
  - 紫宸殿の儀
  - 賢所大前の儀
- 大嘗祭
  - 悠紀殿供饌の儀
  - 主基殿供饌の儀

皇祖天照大神御手に寶鏡を持たせられ、天忍穗耳尊に授け祝ぎ曰く

吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡

之れ賢所大前の儀の由來する所

又皇孫に勅して曰く

葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

之れ紫宸殿の儀の由て來る所

又高產靈尊の勅に曰く

吾則起樹天津神籬及天津磐境當爲吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命宜持天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉

之れ大嘗祭の淵源する所なり

斯く大禮の御儀は其由來する所遠く且つ久しきに在り、君臣尙父子の如く一國恰も一家の如き我國体の精華を最も鮮明に表はしたる者、我等は此眞義を明昭にし、相共に益々忠誠を抽んで彌々奉公を勵み、以て大御心に副へ奉るの覺悟を定めざる可からざるなり

因に賢所は宮城内に在りて天照大神を祀り三種の神器の一なる神鏡を安置し奉る御殿なるも、大禮は京都にて行はせらるゝ制なれば陛下には此度び賢所を奉安して京都に御幸遊ばされ春興殿に遷し奉る也

宮中の三殿

東	中央南面	西
神殿	【神鏡安置】賢所	皇靈殿
天神	天照大神	歴代皇靈
八神		皇后御靈
地祇		皇妃御靈
		皇親御靈
春秋季神殿祭		紀元節祭
踐祚御奉告		春秋季皇靈祭
		神武天皇祭
		踐祚御奉告
		先帝祭等
神嘗祭		
踐祚御祭典		
即位禮（京都遷座）		
國家大事奉告		

腕扱入會の消除と其影響

高樋生

最近治水上及び町村等公共團体が財政基礎の安固を計る手段として入會關係消除の必要を解くもの漸く多く又一般に其整理の時期を期待するに至れる傾向を窺ふは慶すべきの限りと云ふべし

然れども由來入會權たるものは其エタイ極めて捕捉し難き物權上一種の妖体少して大審院の判例中既に區々の決定ある如く學者間又論議の一致なき所なれば其消除の困難又止むを得ざる事とす、乍併近年の如く水難瀕々として到り其損害額及び復舊施設平均年々三四千萬圓を投せざるべからざる今日に在りては其權利關係の錯綜せるもの少して林野の荒廢看過すべからざるものに在りては或は砂防法並に森林法により其入會關係の不解除より來る欠陥を補捉するの途を講せざるを得ざる場合あるを信ず蓋し之小負傷時の石炭酸消毒に比すべければなり

而して民法上の入會權としては共有の性質を有するものと地役的の性質を有するものとありて又其間學者の論議大審院の判例等にも歸一なきが如しと雖余は茲に此種の解決を欲せず只此兩者の孰れにも屬せざるが如くにして且つ兩者に共通の性質ある如く見ゆる一種の變態入會關係なる腕扱入會に付き論じ且つ其消除に依る影響の實驗談を試みんとするのみ、抑々入會權の主体なるものは部落等の團体的のものなるか又は個人入會をも當然認むべきかは之れ亦疑念なきにあらず然れども茲に所謂腕扱入會權なるものは要役地?の所屬(國有御料の林野を除き)に顧慮なく個人的の採收權なるものなり、茲に於て本論を解決すべき前提として赤松林の取扱が如何に注視すべきかを説かざるべからず、蓋し本多博士の赤松の亡國論としての一説は世の批判喧しきも余は今之れを云爲せず只其の前世紀に於ける公孫樹類が十數種なりしも今は僅に其一種が余喘を保つに過ぎず、はんのき類又二十有余種なりしもの近々數種に減退せしに反し地力の第三期にある現代の赤松は時代に對する第一の適者として其蕃殖力の旺盛なる彼の草類に於ける維新草と同一なるにあらずや、而して今の赤松林保續的の作業は林業界の懸案たる丈け力の消長に關する重大なる問題たるなり、故に若し赤松林に對して特に荒廢を助長する所爲ありとせば嚴に其改革を斷行せざるべからざるや論なし之れ余が茲に變態入會關係なる珍題目を掲げて紙面を汚す所以なり、而して又入會地の名稱たる各其地方的事情により其數實に枚擧に遑あらず、其入會場、入會所、入會地立合山、入付場、入稼山、立入場、請山、差圖山等は常に目に耳に觸るゝ處なれども腕扱場又は腕扱山等の名稱に至つては之を何れの判例孰れの著書にも發見する能はず恐らく我信州一部の名稱なるべきも又其變態なるの關係にも據るあらん乎、余は以上を其前論として以下本入會の狀況及び其解消後の影響に就き少しく所見を述べ以て各地の實例を聽かんとす(以下次號)(九月中旬小縣の客舍にて)

製材場經營法(續)

野尻製材所 金田美行

組織

工場組織は技術的組織及營業的組織の二種にして技術的組織とは如何なる機械設備及生產方法を用ひ且つ之に如何なる系統を與へて運轉生產すべきやを定むるもの即ち陸軍砲兵工廠海軍造船所等の如きにして官營に多し營業的組織とは工場を一の營業として適當に經營管理するに必要なる組織を言ふものにして一般に民業に多く且つ製材場經營等に於ては最も適當の方法なるを以て此處に說述せんとす

組織の觀念の內には秩序分業監督の三の意味を有するものにして工場組織に當て先づ必要なるは整然たる秩序を與ふる事なり秩序有りて始めて業務が敏活に行はれ分業監督も容易行はるゝものなり

適當なる分業は技術的方面に於ては勿論肝要なることなれども營業的方面に於て重要なるものにて該方面の各部課の役員の活動

範圍を適當に限局して其能力を充分に發揮せしめ責任の感念を深からしむる事は即ち分業より生ずる利益なり工場の規模大にして其仕事の多樣なる時は分業の行はるゝ事益々多く從つて各部員をして充分に其義務を行はしめむが爲めには嚴重なる監督を必要とす實に監督方法の備はれるや否やは工場營業としての成功不成功に寧ろ一層大なる影響を及ぼすものにして而も此の監督の組織は主として簿記及計算の方法にて行はるゝものなり

元來製材工場の總てに對して適當なりと云ふ組織は有る可からず又一定の組織が或る場合に有効なりし故を以て直ちに之れを取りて其まゝ他に適用するは不可能なれば以下唯多くの場合に於て適當なりと思はるゝ組織に付き一言せんとす

中位規模の工場の營業的組織に於て一般に必要とせらるゝものは簿記出納通信買入販買發送計算等の仕事にして工場の大さが或程度に達して一人にて是等の總ての事務を取る事を得ざるに至れば勢い別々の部課を設くるの必要を生ず此處に多くの場合に適當なりと云ひ得可き組織を示さんか次の如し

- 技術通信課
- 作業部長
  - 機械課
  - 倉庫課
  - 勞働者雇入及賃銀課
  - 業務課
- 重役
  - 一般通信課
  - 文書課
  - 統計課
  - 監督課
- 庶務部長
- 營業部長
  - 簿記及計算課
  - 出納課
  - 取引通信課
  - 買入課
  - 販賣課
  - 發送課

事業の規模小なれば各掛は一人にて受持ち得らるる場合あり更に小なるものにありては右の數課を合して一とすることも出來又反對に事業の規模大なる時は更に細かなる分課の必要を生ず此組織ありて始て工場に於て働く人の權限が定まり又之によりて各個人又は其の一團が相調和的に敏活に且つ經濟的に全體の利益の爲めに協同働作をなす事を得可く有効なる組織は實に人間の精力を最も經濟的活用せしむる最良の手段也一定の資本勞力を費し出來得るたけ最大の効果を收むるがためには工場の組織は論理的系統的、學術的、なる事を要す工場の組織さへ良好ならば各自は互に他に信頼して協同の實を擧ぐることを得又營働者も自己の仕事の結果の善惡を自ら容易に判斷し得るに至るの利益あるなり

工場組織の首腦となるものは重役なり重役は如何なる範圍の人より之を選ぶを適當とするかと言へば凡そ次の三種とす即ち實業家技術家法律家之れなり

而し法律家の長ずる所は勿論法律上の知識なれば假令商人的又は技術的の知識技倆ありと雖も工場の最高指揮者として最適者と云ふ能はず固より得意材料納入者勞働者使用人政府等と工場との間に法律關係の生ずることは多からむも之れとて工場經營の全體上より言はゞ甚だ重要にはあらず從つて法律家の工場に對する關係は寧ろ顧問の地位を以て適當となす次で技術家は若し商人的の經驗と技倆を充分に備へ居らば重役として甚だ佳なるが如きなるも一般にかゝる資格を有する人は稀にして結局工場の最高幹部は實業家殊に商業教育を受け且つ經驗ある實業家を以て最適當とせざる可からず

一の工場の盛衰は固より其技術能力の善惡に因ること大なりと雖も營業的經營方法の巧拙如何は更に一層大いなる結果を生せしむるものなり

但し商人出身の最高幹部と雖も其工場の業務に必要なる專門技術的知識を備ふるを要するは言を俟ず要するに此問題は重役は工場を營業として成功せしむるに足るだけの

器量ある人物を要すと云ふに歸着す

一つの企業の首長となる人は個人として誠實勤勉機敏果斷公平等の美質を具備する人であると共に其企業を指揮經營するに足るべき知識の必要と經驗及觀察力判斷力を要す卽ち重役に適當の人を得ると否とによりて企業の成功に重大なる關係を有するは世間の實例之を證して餘りあり而して如上の素質と能力とを兼備せる人は稀に之を得るが故に斯の如きは企業に取り最も尊重すべきものなり例令ば五十万圓の資本の工場が從來一年に五万圓卽ち一割の利益を擧げ來りたるが新に能力ある重役を三千圓の年俸（報酬）を以て招聘し其働によりて六万三千圓の利益を擧げ得たりとせば重役の俸給を除きて尙一割二分の配當をなし得るなり能力ある人を用ふることの企事に對して利益する事は概ね斯の如し能力を有する重役に與ふる俸給の負擔と人格能力に缺げたる重役を用ひたるが爲に生ずる企業の危險の大きさとは到底之を比較すること能はざるなり

重役の仕事はあまり多忙なるは不可能なる事にして企業の首腦者は考慮を回らす餘裕有るを要す重役は其企業の現狀同業者市場の狀態を知悉し將來畫策をなすことを要し其仕事の一として絕えず配下と接觸し例へば每週一回營業及び作業部の部長を召集して會議を開き其意見を聞くが如きは最も適當なり其目的は種々なれども第一部長をして營業の狀態を說明せしめ、第二新なる立案改良等に付ては協議する事、第三部長及其配下の意見、希望等を申述べしめ意思の疎通不平の消滅を圖ること等は重なるものにして重役は又常に其配下を刺戟して工場の組織及生產技術の改良に志せしむることを怒めざる可からず多數の從業者は注意さへすれば重役の目と考の及ばざる所に工場の缺点を發見するものなるを以て是等の缺点に對する改良意見は充分に尊重し注意して之を攻究するは最良策なりとす

作業部には技師技手職長職工等總て技術に於て活動するものが從屬する者にして更に原料材料置場の管理をなし又賃銀課も其下に屬し場合によりては見積計算のみならず全部の原價計算を掌る場合有り但し此後の二課は之を營業部に屬せしむること多し營業部の下には前揭の分課の外原料材料倉庫課及賃銀課を加ふる場合あり營業部には支配人及各課長直屬す部長はすべての配下を支配監督し充分の活動をなさしむる責任あれども大工場にては獨力を以て到底之を行ひ得ざるが故に課長に一定範圍の權限を委任する場合あり此場合には勿論其課長には獨裁權を與ふること必要なり企業の指導者が老練にして技倆あり且思慮深く度量大にして自己の部下を自己の利益の爲に盲從せしめず又自己の名譽心の爲に正當に行動せる部下の自尊心を害するが如き措置を爲さゞる事に注意する時は部下は其仕事に興味と熱心とを生じて企業繁榮の源を養ふに至る若し配下に相當の威嚴を保たしむるに有らざれば職工は自然に配下の指揮を輕んず配下も遂には立脚地を失するに至るべし これ由々敷一大事にして秩序憫亂し工場破滅の基なり（以上）

他日幸ひに餘白も有らば庶務部の統計に關し一言披見を申述ぶ可く今回は之れにて筆を止む。

文苑

御大典につきて思ひ出づるまゝに

竹軒生

千載一遇とも申奉るべき御大典は此月十日より十七日にかけてゆかしくも菊花薰ずる舊都に於て取り行はせられ六千萬の民草は如何にしてか此目出度日を祝賀し記念すべきかに狂奔の姿である黴て眼を西方に放てば歐洲は修羅の巷に阿鼻叫喚の慘狀を呈し支那は國体變更に就て暗雲絕ねず漲り颯風は何時突發を見るか圖られぬ有樣である然るに我邦は穰々平和の氣象に滿ち我皇の御大典を遺憾なく奉祝し得るは臣子として誠に歡ばしき限である畏れながら　聖上に於

かせられても定めて御滿足の御事と察し奉るのであるさて御大典に就ては新聞に雜誌にあらゆる方面から說き盡されて殆ど遺漏なき有樣であるから吾輩敢て蛇足を加ふるに及ばぬが心に浮べる儘を左に記して見やう

御卽位及大嘗祭當日官國幣社以下神社にて行ふ祭祀の祝詞は官報を以て發表されたが全く古式に則れる純國文で莊重典雅の中云ふに云はれぬ妙味が存して居る元來祝詞とは『宣り說言』の意で專ら神前に白し或は神祇の威德を頌し國土の安寧を祈り或は建國の由來を述べて天下の泰平を祝するものである彼の天照大神が天の岩戸に御隱れになつた時諸神が奏した祝詞は惜しい事に傳はらないが大神が之を御聞きなされて痛く賞美なされた事が古事記に見にて居る今日傳はれる祝詞の尤も有名なのは新年祭の祝詞と大祓とであるが殊に後者は堂々たるもので日本建國の由來を述べ國中の罪穢を祓ひ去るあたりは文辭實に雄渾壯大を極めて居る

次に壽詞と云ふものがある之は『吉言』の意で祝詞とは異りて朝廷の大禮又は高貴の饗宴等に用ふる賀詞である併し文体は毫も祝詞と異らぬ壽詞の今日に殘れる有名なものでは中臣の壽詞と出雲國造神賀詞とである今回御發表になつた祝詞は全く古來の祝詞や壽詞に則つたもので古文の成句を其儘用ひた所が多い今回御卽位式當日に內閣總理大臣の玉座の前で奏する壽詞は新聞の傳ふる所によれば古風に依られず漢文調で起草者は股野秘書官長、多田御用掛、平沼檢事總長の三氏の樣に拜聞する

次に今日では已に廢れて居るが古は宣命と云ふものがあつた宣命とは元勅命を宣り聞かす義で轉ト て勅語其者を云ふ樣になつたが之は特に國語にて綴れる詔命を云ふので漢文にて書けるは詔勅と云つて別つて居る宣命は卽位、立后、立太子其他國家の重大事に際して百官及庶民一般に宣り聞かすものであるから平易を主として祝詞や壽詞のやうには修飾もないが併しよく味へば上代の天子が下民を惠み給ひ君臣恰も父子の如く相愛し相敬し和氣靄々たる眞情が流露して辱さに感泣せしめるものがある上古の勅語は皆此宣命体であつたが日本書記撰進の時皆漢文に直せし故上代のものは知る事が出來ぬ唯幸ひに續日本記には文武天皇以下桓武天皇に至る六十二の宣命を載せてあるから是に依て宣命を研究する事が出來る宜命の書方は假名の發明なき以前だから勿論總て漢字を用ひてあるが古語などは特に漢字音を借りて明確にあらはし天爾乎波は必ず字音により尙細書して讀み易からしめてある此体を宣命書と稱へる祝詞壽詞の書方も全く同一である、さて宣命の讀手を宣命使と云ひ參議以上の人であるが其讀方には一種の譜があつて餘程面倒のものであつたらしい之は勿論聽者に感動を與へんが爲である而して宣命の文中諸聞食止宣と云ふ度每に皇太子先づ唯と稱へ次に親王以下共に唯と稱へ皇太子先づ再拜し次に親王以下共に再拜したのである此が餘程面白い處で百官共が天子の勅を虔みて承遵する樣が目に見ゆる樣である今日は宣命体は廢れたから御卽位式の御勅語も漢文調のものと思はれる時代の趨勢によりて國家の式典も多少の變遷は免がれ難い事ではあるが只我が建國の由來を示し我が美しき國民性を現はせるが如き式作法は可成存續させたいものである畏くも　明治天皇は登極令に於て餘程聖慮を其邊に注がせ給ひし樣に拜察する彼の從來の支那風の幢旛や衮冕の禮服、燒香などを御廢止になり神武天皇御東征の喜例を取りて靈鵄形大錦旛、頭八咫頭大錦旛等に改められしを見ても叡慮の一端を察し奉る事が出來るではないか、吾々は御大典の如き最古の儀式を拜するにつけ宛ら生きたる建國の歷史を讀むやうな氣がするのであるかくて國民は皇室を仰視し民心の結合は益々鞏固になることと信ずる最後に光仁天皇御卽位の折の宣命の一節を揭げて此文の結末とする

天皇我詔旨勅命乎。親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民、衆

聞食宣。掛母恐伎、奈良宮御宇倭根子天皇、去八月爾、此食國天之下之業乎、拙劣朕爾、被賜而、仕奉止、負賜授賜天皇詔旨乎、頂爾受被賜恐美受被賜懼、進母不知爾、退不知爾恐美坐久止、敕命乎、衆、聞食宣然此乃天日嗣高御座之業者、天坐、地坐祇乃、相宇豆奈比奉、相扶奉事爾依天志、此座者、平安御坐天、天下者所知物爾在良之止奈母所念行須。又皇坐天下治賜君者、賢臣能人乎得而志、天下乎波、平安治物爾在良志止奈母聞看行須。故是以、大命坐勅久、朕雖拙弱、親王始而王臣等乃相穴奈比奉、相扶奉事爾依而志、此負賜授賜食國天下之政者、平安仕奉倍之止奈母所念行須。故是以、衆、淨明心正直言以而、食國政奏比、天下公民乎惠治倍之止奈母所念行須止勅天皇命、衆聞食宣。（下略）

脫面錄

由緣生

▲『大体今年の雜志部には部長かゐないのかゐれとも又自分等の謬選だつたのか』と會員諸君の內には大分氣を採んで戴く方があるとは嘗てさる者の注進により記者の耳底を徹動否大いに震動せるところ……。

▲それならば大いに書いて大いに讀ますべし、大いに面白がらせて大いに安心さすべしとは會員諸君のひとしく口を揃へて迫らるゝ所でてらふ。物事はさうは行かぬ、面白い記事の反面には賢明なる記者にも苦心する所あるを察せらるべし。呵々

▲冗談はさて置き昨夜自習机に向ふてふと口號んだ事がある、それは彼の『能ある鷹は爪かくす』の一句である。何と思つてこんな口を滑らしたのか今更頭を振り立てゝ考慮三昧に入るも思い及はず。唯職責怠慢を自ら痛罵せらるが如く感じたるのみ。

▲『林友の原稿は八日には必ず締切り度いから』と新家先生がいつしやつたのも昨日の朝のこと、しかし記者の手許には何の腹案もなければ勿論何の原稿の余祐もある筈がない記者がこれより仮面を脫して錄せんとする所以のものも亦即ちこれなりである

▲そして八日と云へば明日である。大袈裟な廣告文を掲示してもおいそれと原稿用紙を持ちに來て書いて呉れるやうな男は蚤の子程も居ない。所謂文才家なる者の前に低頭平身して賴み奉つてもすぐにはやう書かずかへつてつき上りがする位のものゝ實は書くだけの頭を有せざるか故でない。

▲さうこうして手許の原稿用紙は急騎に羽でも生やした心持で飛ばせては子つた。が扨次にはそれが明朝までにどうにかこうにか物になつて呉れゝばよいがそれが案じられる。蓋本誌に名論卓說なき所以。語に言はずや『推敲す』と

▲それでは記者が惡いでないか、みんなにこんな騷ぎを持ちかける必要もなく、又發行を早めたのも記者等の勝手、こんな一文にもならぬ雜誌を吾々は何もいそいで讀みたいのではなかつたとお叱りを頂戴するかも知れない、それはあまりにつれないと云ふものゝ會員諸君！そこに微衷の存するところを酌まれよ。

▲實は記者自身も『雜誌を立派に、雜誌を立派に』とは平常よく耳にする所なれば今度の御大典記念號こそは可成なものが出したいと思つてゐた矢先、心の內ではあれかこれかと思案に暮れてゐたのだ。

▲扨諸君はそれがどうしたと詰問を發せらるであるふ。記者もそれがどうと云ふではない、がこの位ひならいつも記者の所謂『ねせ歌』でもどつさり作つて置いてお目にかけるのだつたかければよかつたと少々思はぬでもない。

▲それかといつて記者は軟派とでも云ふべきか漢文口調のた世辭風景論やアルトラマンデーン本修養論はもとより筆を投むべき限りにあらず、茅原華山氏の新著『銀杏の葉蔭』に見ゐる『今々冬ーン』の街は私は屢々夢に見る位が落ちかも知れない。

▲次に今回福福嶋町に在住せらるゝ川崎本雄氏が活版印刷を開始された事に就てゐる記者は毎月一回乃至二回宛を編輯室で生徒も職員もひけた午後の放課時間を割愛して小數な一二年の委員と協力して多忙なタイムを送つてゐる。それは云ふ迄もない此の林友誌を發送せんが爲めである。其都度記者は『雜誌をもつと立派にしたい』と云ふことを忘れたことがない。

▲諸君等の爲め我が校友會の爲めに發送に從事する位ひの事は何でもない事だがたゞ一つ困るのは現住所の不明なのと現住所の不明な爲めに原籍地へ送つたのが諸君の父兄の手によつて諸君の手許へ廻送せられないことそれが爲めに送らない送らないと在校會員の多くへ送附方を依賴さるゝことである。

▲も一つは諸君の轉任通知のない爲めに長く同所へ送る。送られた役所で廻送して呉れゝばよいが隨分とりだくりにされる。また届かぬと云ふ仕末になる。届かない時は届かないで雜誌部宛に、轉任せられたら轉任せられた其都度住所を明白に且つ早速通知されん事を希望します。それでなければ不明は不明で一二發送の責任は斷ドて負はない。

▲記者の嘗て知つてゐた某新聞兼一小地方雜誌記者はかう云つて居た事がある『僕は雜誌を出す爲めに毎月多忙な一日を彼の喧噪な印刷工場に入つて下等な職工等と共に油によごれて紙面の分割や校正の爲めに汗水流して働く』と其所爲かして今はゐない人になつたと云ふが記者も雜誌の印刷を藝術家とも云ふべき川崎氏に依賴し、もつと紙質でも改良することが出來て印刷の一日を川崎印刷所で送るやうになつたらもつとハイカラに、もつと諸君のお心にそへる事が出來やうかと思つてゐる。

▲がこれは記者の理想たるのみに過ぎずして終るかも知れないと云ふ事を豫め御斷り申して置く次第である。それはなせかと云ふに最早賢明なる會員諸君の御承知あるべき經費問題唯これ一事あるのみである。世の雜誌經營難に倒るゝものは即ちこればかりであるのちやと書くとあまり大袈裟になるが實際さうであるから仕方がない。この林友子たる者資本主はまことに多大な樣で結構なものゝそうはゆかぬ。

▲今年の春の豫算會には『雜誌を癈めよ』、『古い卒業生には送るな』、『金の送つて來る會員にのみ送れ』、『部數を減せよ』などの聲は隨分高かつた。然しそれは優渥なる會長のむしろ歎願と云ふべきによつて會員たる卒業生一般の机上に届けることはなつた。

▲校友會々則第十七條には確に本校卒業生にして特別會員たる者は機關誌代として一ケ年金參拾六錢納付して戴く旨しかと載つてゐる。中には但し書の通り本校卒業の際誌代五ケ年分（但し割引）金壹圓五拾錢までもを前納せられる方などないでもないがそれも多くがさうであると云ふのでは勿論ない。

その金でさへも今年からは基本金に積立てる事にきまつたので使へると云ふのではない。むしろ雜誌はその反對に殖ゑるばかりだ。要するに諸君の應援如何は我が校友會の一大事業たる本誌殺活の原動力ともなるべきものだ。こんなものをと陰でけちを下さずに惡いならどこが惡いと眞向から刷新を促されて本誌を權威ある會員相互の一大論壇として大いに尊重せらるるとともに本誌の使命を全ふせしめられんことを斷じて記者ひとりの切望にあらざる所也。

▲終りに臨み言辭の粗野にして禮節に缺けたるを謝し、併せて去る年の今月今夜（十一月七日）！青島陷落！し提灯行列！なぞと思ひをはせ舍則を犯し、燭火を辿りて認めし事を告白するものなり。讀者夫れ苦衷の程を許されよ。

小品三篇

山崎桂花

秋を送る

階前の梧葉に秋聲訪れ涼風に、なびく尾花が蔭に蟋蟀漸く鳴きはじめぬと、言ひしは眞に昨今の如き感あるにあらずや。然るに

『時』の流は滔々として去り思ひ出の種多き大正四年の秋を送るべき時は、すでに至りぬるか！あはれ白駒のあゆみ、何すれぞしかく早きや。流れ去る月日の中に、千載一遇の御即位大典は國民歡呼の裡に行はせられ寶祚の愈々悠久なるを禱り、聖壽の益々きはまり無きを祝し奉る萬歳の叫は、今尚吾等の耳中にあり。吾等はこの一大紀念を長へに記憶し永く〳〵子々孫々に傳へん哉

嗚呼過ぎ行き給ふ立田姫よ！肅然として悲壯なる秋の景色をいかなれは、かくも速に過去の夢とは葬り去らんとなし給ふぞ。吾等は、長く〳〵この景に憧れんとしたるを……さらば行け！吾等は又來む時を樂しみて、ここに、しばしの別を告げん、いざ、さらば、秋の女神よ！幸にすこやかなれ。

にしきなす木曾のもみゞ葉散り
果てゝ、くれ行く秋ぞいとど淋しき

秋夜の虫の音

颯然たる涼風に、數抹の薄雲散り、弦月漸く出でゝ秋氣いと清く、虫聲しきりに、さゝやきて秋の悲哀を語る。あゝ思へば秋の夜の虫の音ほど哀れ深きはなかるべし、宜ならずや、古來秋を歌ひし幾多詩歌の中にも、虫語の哀を述べしもの、いと多きを思へば。古の猛將勇士も曾ては腥風いたましき戰場に於て、我が劍、すでに折れ、我が馬すでに倒れ、矢又、漸く、つきたるの時松がしずゑに落ちかゝる、淡き月影の下、秋蛩しきりに吟せし時、そゞろ戎衣の袖をぬらせしと言ふにあらずや。吾等も亦哀れなる虫の、さゝやきを聞き、眩然として、涕をたれはるけき桑梓の空に思を走せ老い給ひし父君母上を慕ひまつれること、そも幾度なりしぞ！あゝ人をして悲哀の思ひに沈ましむるもの、誠に秋夜に於ける虫の音なる哉。

虫の音も又奥山のもみぢ葉も
枯れて淋しくなりにけるかな。

木曾の秋

秋〻吾人はこの語をくちずさむ毎に、必ず寸金てふ、錦れりなす四山の紅葉を聯想す我が住む木曾の山谷には至る處に紅葉あり蘇水の奔湍滔々として流るゝ岸邊、其處に二月の花よりも紅なるもみぢあり。あるは幾多常緑の樹林中に黄に染み、紅に化してもみぢなす木々の點綴する景色、あるは峨々として山骨のうばたつほとり、優なる楓樹唯一株いとも雅びに笑める風情等秋に於ける蘇山の景色は、荆關、倪黄の筆をかるにあらざれば、よくこの狀を描出する能はざる佳絶の地甚だ多し。

吾等は風騷かにして百花野に滿ち、胡蝶翩々として菜花に、たわむるの景を嫌ふ者にあらず、將白雪粉々須臾にして銀世界を呈する冬の佳景を、いとふ者にもあらざるなり。然れども、滿山凡て、光錦なる木曾の秋景色を見ば心自ら躍如として壯美を歌ひ決哉を叫ばざるを得ざるなり。吾等は、かるが故に木曾の秋景を愛し、かるが故に之にあこがるゝなり肅然たる秋光の輝く處、悲壯なる景致山野に充つ。あゝ美なるかな、木曾のもみぢば、

あゝ壯なるかな木曾の秋。
あはれにも又美しく笑めるかな、
木曾の山々かざるもみぢ葉。

我れ自身を知れ

下平龍水生

希臘否世界の聖人と仰がるる、ソクラデスは、居常人を敎へて曰く『汝自身を知れ』と蓋し自身を知り、自己を明確にするは、是れ道德の根本にして又知識修得の根底なり世には往々他の多くを知り、卑近にして且つ最も必要な、我自身を知らぬ人の、余り少なからざるを見る。殊に相等の學識才德有り、素行修まりたりと、世人に尊敬せらるる者に於てすら、時々我れを知らざる行爲を爲し、敢て顧みざる者有り、況して匹夫野人に於てをや。

昔魯の哀公嘗て、孔子に會ひ問ふて曰く、『我が家來に實に粗忽かしい奴が有つて轉宅して妻を忘れたと』孔子答へて曰く『其れは未だ好い、もつと粗忽な奴が有る、傑紂は其の妻を忘れる所ではない、自分の體を忘れてしまつた、世には妻を忘れる人は

少ないが、其の身を忘れる人は多いぞ、』と誠に是の如く、隨分其の身を忘れて知らざる者は、海濱の眞砂に比し天空の星斗にも譬ふべし。吾等か我が自身を知ると否とは直ちに、一身一家一鄕一國の一榮一落に關し、引いては、學術技藝の發展進歩に、至大の影響を及ぼすものなり。

我自身を知るは小にして大、易にして難小を積みて大を爲し、易より入りて高尙に向ふは、是れ自然の原理なり。徒らに、小を積まず、易より入らずして、大を爲さんとし、高尙たらんとするは、宛然木に緣りて魚を求むるが如し。自身を知り自己を知らんと欲するは、宛ら暗夜に燈火を、求めんとするに異ならず。一點の光明に到達するだに、容易ならざる事なり、まして人事界に於てをや。然しながら克く冷靜沈着に自己を詳察せば、何等の艱難辛苦を要せずして自身を知る一點の光明に到達せん事、掌を指すより容易にして且つ明なり。

然らば如何にして我が自身を知るを得べきや。こは觀察する各自の方面方向方法手段等に依り、皆同一ならずと雖も、要するに我が身に關する、職業、年齡、身体の强弱精神の狀態、及び我が身と家庭親族及び朋友との關係如何なるかの如く、我が身体に接近したる、最も手近の事項より、各方面に亘り順次擴張し、次第に宏遠に及ぼし、克く〳〵熟慮せば宜しかるべし。

斯の如く經路を終へ、始めて我れは現在如何なる置位、如何なる境遇、如何なる力量を有するかを知る。是れ等を知りてこそ、今後の方針、目的に對し、奮勵し、努力し勤勉し、忍耐し、節制し、興味をもちて從事し得べし。

吾等が事業をなし、失敗を來たす多くの事情は、是の目前五尺の小軀が、現在如何なる境遇、如何なる位置、幾何の力量、幾何の自信と自覺とを有するかを知らざるに原因す。

眞に我が自身を知らば、事に當り決して蹉跌せざるべく、縱令蹉跌すとも周囲の事情に通達せる故、大いに自覺し、大いに反省し、大いに奮勵努力し、再び起つの勇氣出づ。境遇の許さゞるに學者大臣大將たらんと欲し、身体羸弱なるに拘らず過激の勞働を採らんと冀ふか如きは、我が自己、我が自身を克く解せず成が大切なる自身を忘却せる最も甚しき者と云はざるべからず。克く我れを解し、既に爲し得と確信せば、天下何物をか爲し能はざる事あらん。企てゝ成就せず、徒に他を恨み天命を嘆ずるが如き又、意志薄弱にして、自己自身を正當に解せざるの過に坐するなり。

我は何を爲し得べきか、又何を爲さゞるべからざるかは、何人も考慮するを要する所なり。

是れ等に對する我自身を知るは、鑑て人格を高尙になす所以なり。人生れて何を爲すべきか、禽獸と等しく、唯飛ひ、唯寢ね、唯死し、唯醉生夢死するのみなれば、人間の價値は何所に存するか、禽獸と何等選ぶ所なく殆んど零と歸すべし。

『朽木彫るべからず糞土の墻は築くべからず』となすも、自己が自身を觀察するに於ては、又豈多少の價値を認めざるべけんや自己自身の價値を認むるは、是れ眞の自己を知る一端にして、且つ眞に自身を知る萌芽は實に共に存す。日に三度我か身を顧るも又眞の自己を明瞭に知らんが爲なり。自己を知れば自然、自重自信の念を强め、以つて成功に導く。彼の徒に成功にのみ汲々とし、未だ我が自身を知らざるは、本末顚倒の滑稽も又甚だしと云ふべし。

世に學生は學生らしく、農夫は農夫らしく官吏は官吏らしくあれと云ふ事あるも、前述の如く、克く自身を解し自己を知り、自己の責任を全うせよとの戒めならん。

一朝風雲に乘ト、天下の耳目を聳動せしめたる者、古來其の例乏しからずと雖も、直に採つて摸範とすべきにあらず。

又機會を圓き球の如く、捉ふる事頗る困難なれば、先づ基礎となるべき自己を知りて後事に從ふべし。

要するに我等は第一に、自己の置位自己の境遇、自己の力量、及び自己の價値を、極く詳細に觀察し、以つて眞の我れ、眞の自

己、眞の自身を發見し、判明たらしむるを要す。然して後徐に、自己今後の方針確立し、行爲の程度を考慮し、一旦決定したる曉は、忠實勤勉に、勇猛精進せざるべからず。斯く有りてこそ、理想的の人格完成と事業の成果も、望まずして得らるべし。自己を知るは幸福を產むの母たる事を忘るべからず。

御即位大典を眼前に扣へ、今後我が身の戒めにせばやとて、聊か所思の一端を記す。

（二五七七五、一一、八）

秋三篇

百瀨まだき

■山

滿天高く澄み渡り枯葉樹を離れて秋風に躍る。これ秋の天地なり。殘陽森林を射ていくたの遊君、枯草を踏んで去らんとするところ、これ秋の山なり。あゝ如何に秋の天地の趣味あるかよ。

朝！陽光東の山端より西の峰端に眩き、金線を射そめたる時、翠綠色褪せたる萬梢の再びよみがへりたるが如く滿山悉く紅葉を垂れたるに似たり。

午！鮮かに、麗かなる太陽天心に懸りて靜かに頂きを照らす時、天の益々高きを覺ゆ。

暮！一日の課を果せし暮陽將に西山の麓に入らむとしてそが名殘りを惜むの時夕を送る、寺々の鐘、淡き、淡き、暮を縫ふて餘韻嫋々。

夜！紅の秋の山月のみ獨り冴渡る時秋草の裡に鳴く虫の聲いと微かに、いと哀れに！

■森へ

親はしの君よ、うらゝかに晴れて雲なき日浮世半日の閑を偸みて、末枯れの野の果てに紅葉せる、あの森に道ひ給へ。凋落の秋の眺めはいと淋しけれ。されどこの淋しき裡に清く美しき姿の見ゆるなり。

君よ、靜けき秋の眠りをさますことなく靜かに森の中へと歩を進め給へ、名も知らぬ小鳥の麗はしき聲して樹々に囀り交せるも聞かむ、黃ばみたる木の葉の其肢に拂はれて、はら〳〵と飜るをも見ん。松、柏、などの常綠樹こそ變らず綠ならむ、其他の草も木も皆色づきて、濃き、淡き、とりどりの中に美しく紅葉せる蔦の、千代經し老い松に幾筋となく、からみつきたるは殊に風情あるにあらずや。

錦と、見まがふ落ち葉の中に榎の實、櫸の實、などの僅に顯れるもいと面白し。

春の木の芽、夏の茂り、冬の木立ち、何時とてか森の麗はしからぬはなけれど、いかで、紅葉せる、森の靜かにして美しきにしかん。淋しくなりまさる秋の空に美の神の限り無き力をば當に此森に集めけむ。常に自然美を謳歌し給ふ君は屹度此錦の森にチャームされ給ふべし。近き寺々の鐘、夕を告げて暮れ殘れる彼方の森に鳴く鳥の聲に醒まされ、再び末枯れの道を辿る時、君が心に絕ねず、或るものに引かれ、幾度か暮靄の森を顧み給ふならん。

げにこの淋びしき眺めの森に限りなく清き美しき美の神の聲は聞ゆるなればなり。

■月を賞す

玉輪一痕東山に顯ばるれば、長空皓然として些の陰翳なく、娟々として玉鑑の如く、其碧潭に落つるものは黃金を鏤め、其清瀨に映ずるものは金龍の如し。

樹を離るゝ紅葉はうが光に閃めきて、宛ら玉屑を篩ふに似たり。

かしこなる、老松の枝々皆月光を浴び、玲瓏、透徹、怪しげなる影、黑く地に湧き出で宛然一幅の名畫成す。

肅然たる金風颯と我面拂つて飛べば白芒、爲に靡き、垣根にすだく虫韻切々として歎くが如く、訴ふるが如し。

光輝愈々皚々、燈火影淡く、天高く、氣澄み、林影歷として指顧の間にあり。

秋月の妙趣、斯く盡くるところを知らず。誰か又秋の寂寞を嘆かん。

强く生きよ

六合道人

三ヶ月間病魔に苦められた私の頭は突飛な空想に耽るのみで思索の泉は涸れ果てた、今度の大典記念號にも記者としての責任の前に毎日書かうとして筆を持つた。けれ共

幾何位焦慮つても此夏の旱魃の樣な頭では何も書けずとう〳〵原稿締切の今日になつたカレトの所謂無上命令に接したので遂にこんな感想をかく事にした。

青い〳〵澄み切つた此頃の空を仰く時私は此大きな自然の無限を思ふと同時に憐れな小さい人間の意氣じなさを考へる、無限の自然に對する有限の人の力、コンコルドの哲人トローが森の中より此社會を睨て『オヽ彼等ハウヂ〳〵群ツテキル云々と』云つた哲人の目にかう映じたも尤もだと思ふ。

かう考へると私は眞の心の奧底から淋しさを感するうして何とかして此悶へから逃れようとあせるけれ共あせればあせる程尙小さく弱い、しかし小さい中にも伸張してあく迄も大きな自然を征服せようとする生の力に淋しくみの中に幾分の强さを見出す。

自然は大にして無際限たれかし此無際涯なるものと小さくも戰ひつゝある吾等は自惚れではない慥に大きく思はれる。

昔のあらゆる民族は悉く太陽を崇拜してゐたりしてこれよりあらゆる美しい光の恩澤を蒙つてゐたが此偶像は人類の社會か進步し是以外なるものに大なる歡喜と愉樂を感する樣になつてから幾分破壞された。

今私は二三の新聞を讀み終つて自習机に凭れながら考へてゐる誇張な抽象な大きな活字が私の頭の中を飛びまはつてゐるうして私は何たか嬉しいうれは偶像を破壞する爲に戰爭程有効なものはないと思ふから、此時に吾々は今迄崇拜して來た偶像や輸入哲學を根本から破壞して熾烈な熱狂的な愛國的精神を以て自ら新らしい自己を創造して突進しなければならないいつ迄も他人の偶像を拜したり他人の宗敎や哲學に征服されてゐてはならゐ須く汝は汝の哲學に生きなければならぬうしてそれを土臺にして其より多くの翼を與へて遠心的に大きく深く活動し不斷に努力しなければならぬと思ふ。

人生は血腥き戰場だ生きんとするものは大いに强く生きなければならぬ。

秋のグリーフ

華村生

野路を籠めてゐた朝霧の霽れゆく時私は野邊に立つてゐた。夏の花の色彩のやうに豐潤でない花瓣の小さく引きしまつた秋の花—萩苅萱女郎花—所謂秋の七草が露繁く咲いて其等の千草の中には露の夜を啼き明かしたのかまだこほろぎなど餘韻のある澄んだ聲で啼いてゐた然し此の白露に冷たい命をつなぐ虫の聲がどうして悲しくないと言はれうか其聲は朝だけに一層泌々と私の心にしみ入つた。それに聞き入つてゐた私は何んとも言へない悲しいデリケートなセンケメントのふるへを感じたのであつた……

突然黃色な花粉を身につけた小犬が一匹美しく咲き亂れた秋草の中から走つて來た、虫の聲は止んだ、其小犬は動かず立つて居る顏を見あげて又彼方に走つて草花の中に消ゑた。私はそれに氣が付いて空を仰いだ時何時しか黃金の色に輝く秋の日は高く昇つて黃いろい弱い日影をあたりの草原に投げてゐた。折から吹き來る靜かな冷たい朝風に野末に立てる落葉松のこまかい葉がはらはらと私の頭と言はず手と言はず淋しく散りうゝいた。『あゝ秋だ凋落の秋だ淋しい秋だ。』私は思はずかすかに叫んだ。

冷たい風、‖千草に啣く虫の聲薄い力弱い黃いろ日影‖なんと淋しいものであろう。

私は此の寂寥なステートの中に何時までも佇む事は出來なかつた（日記より）

汝自身を恃め

二年岩田生

『天は自ら助くる者を助くと』區々たる數言中何ぞ夫れ無限の訓誡を含める

徒に人を恃みて崎嶇多き人生の峻坂を踏えんとせんか若し途中其の人に見離されなば進退此處に谷まり焦慮煩悶更に大聲疾呼して他の救を請はざるべからず、若し又其の人も行路に疲れて仆れ再起ちて手を執り臂を押す能力を失はんか遂に共仆れの止む無きに至らん、己の便るべき先進父兄は何時迄も生存すべきものにあらず、家財遺產は永遠に不朽のものにあらず、假令斯る苦境に陷らずとするも他人の援助のみを是れ願ひ

自己の力を致さゞれば自發の精神は漸次萎縮し自疆の能力は衰退して遂に一身すら猶能く支へ得ざるに至るべし

嗚呼自恃に乏しき者の末路斯の如し

藤田東湖は父幽谷の後繼として彰考館總裁の職務取扱を命ぜられし時『予は父の餘德を恃みて揚々自得官僚諸員の上に居るに忍びず』とて此榮職を辭退せりと、此の精神ありて他日能く家學を以て一世を聳動せしにあらずや

德川家康は武田信玄の大軍を引き受けて苦戰せし時織田信長の援助を請はるべしとの勸告を肯べせざりき此の自恃の心こう群雄雲の如き間に處してよく三百年の覇府の基礎を固めしにあらずや、赫々たる偉業に天下を皷動せし千古幾多の英雄傑士の朝夕の衣食にも窮する微賤の子に多くして其の修養にも成功にも都合よき高門富貴の子弟に尠きは之れ即父祖の餘威に倚り遺財に坐食して毫も自恃自立美德を磨かざりしに因由せずんばあらず。

然れども人は固より孤立し得べきものにあらず蓋世の偉業を成したる人々と雖も先づ父母の保護撫育を享け國家社會の恩澤に浴し且つ各志を立てゝ之に向つて進むに當りても直接間接に古賢師長の感化慫慂に俟ちて益々自己の能力を發揮する等他より受くる所決して少しとせず、政治と謂ひ軍事と謂ひはた利器の發明と謂ひ何れも能く先輩の事蹟考案を參酌取捨己が努力と相俟ちて其の受くる所の智德を倍加し始めてよく成功せるや言ふまでもなし、然り而して先進之を感化指導せんとするや自ら助くる者にあらざれば之を導くに一層の努力を要し而も其の効果は尠し例へば幼兒の手を執りて是を歩ませんとするに自ら少しにても歩まんとする能力を有するものは容易く歩めども漸く物に縋りて立ち得るが如きものを强ひて手を引くとも一歩も運び得ず且つ一度手を放てば忽ち仆るべし、嗚呼自恃の德に乏しき者は正に之れ手を放ては仆るゝ稚兒の如きか

自恃の德は斯くの如く尙ぶべき成功の要義なりと雖も往々にして之を誤り衆議に從ふべき時に當りて自己の所信を貫かんとし師長父兄の訓誨に服從すべきを不羈狷介以て自ら高しとなして敢て從はざるが如き弊少しとせず之未だ自恃の何たるを解せざる者と言はざるべからず、されば吾人は事に處しては先づ熟慮靜思衆議に從ふべき時は直に和從し且つ先進の訓誨に俟つ事あるも決して自恃と矛盾撞着すること無く寧ろ自信じて從へばこは一つ自恃といふべきなり聞くならく我國民一般の性向は元來自恃獨立の念に乏しと嗚呼其の血統の下に生れたる吾人青年も亦果して此の如きか、今や帝國は隆々發展列國嫉視の焦点となり之に向つて打ち寄する狂瀾怒濤は曾に太平洋の水のみならず萬里の波濤は汪洋として殺到し來る、されば此の濤蹴返して白沫水泡に歸せしむるは抑も誰が責任ぞ、負に英と結べども之れ右手に握手して左手に短銃を把持するを思はざるべからず曾て我と睦みし米は我を額上の瘤として之れを取り攘はんとし隣邦固より賴むに足らず、今や我は其の國土が大洋の孤嶋なるが如く其の境遇も亦絕濤の孤島たり、されば賴むは英にあらず米にあらず露にあらず唯々我あるのみ。

然るにこの狂瀾怒濤の衝に當るべき吾人青年が我が國民性の短所を受け繼ぎ恃み甲斐なき他國に俟つて自恃の大德を失はんか狂瀾怒濤忽ち爭ひ起りて此の孤島を埋沒せずんば止まじ、嗚呼國家の前途を憂ふる者豈三度思を此處に致し此の美德の長養發揮に彊めずして可ならんや

美しき空へ

東洲生

夕陽は山の彼方へ沈みかゝつて永遠の空に暫し最後の光を投げると雲は絕望の焰をあげたやうに紅く燃ねつゝうの行方を見つめた。無縫の夕闇が其の後から黑い裳をひいて徐々と歩みよつて來ると野も森も遠い山脈も皆次第に暗くなつた、野道を歸る人も馬も段々と其の輪廓を失つて行くように黑ずんで見ねた。

『夕燒けしても……』と何處かで頻り

に歌つて居た村の子供達の聲も何時しか途絕ねて仕舞つて最う靜かな夜のとばりは下された。その夕、夕檢査も濟んで暫し、寮舍の窓に凭りかゝつて星の煌く遠くの空と闇の中にほの黑く見ゆる駒嶽の姿を凝と眺めやつて居る時私の胸の奥底の幽妙なる靈感の手が不圖無弦の琴線に觸れたかと思ふと若い情緒は美しい想像の翼を擴げてうして當途もなく幻影を追うて彷徨ひ歩いた。

と私は私の周圍に鬱蒼と繁茂した青葉の森を見たそれは寒いシベリヤ嵐の通ふ北海道で私は其の中に角帽の姿で筇を引いてさすらひつゝ有つたのだ、吾が愛するI兄と手を携へて……ふと氣が付くと何時しか私は私の故郷を思ひ出した、遠く霞む彼方の山を越ねて其の麓に私の懷しい家が有るのだ、我を愛する父も母も、我を慕ふ妹も弟も、其處に居るのだと思ふともう堪へられぬ愛着の念が湧き出でゝうつと『父よ、母よ吾がはらからよ』と呼んで見たがその聲はすぐ澄んだ夜の大氣中に消ねて了つて誰も私に應へて呉れなかつた、遣る瀨ない悲哀はひしひしと胸に逼つて來た、我が愛慕する人々はあの燦く大きい星の眞直下に居るだらうか、若しううだとしても私の聲が何うしてあそこ迄届くだらう——かう思ふと私は急に心細くなつた。すると何處からともなく穩かな明笛の音が流れて來た、多分誰か徒然の慰めであらう耳を澄してそれに聞き惚れると何んとなく自分を慰むるやうな又自分の今の心持を歌つて居る樣に思はれ妙に懷しい追憶となつて想像の駒は自然と其方へ歩ませられた、私は笛の主を尋ねて長閑な園へ歩を移した、露冷かな路傍の草の葉に濕つて履き馴れぬ草履は重かつた靜寂な然も美しい其の夜は夕靄の薄いヴェールに色まれて居た、仄白い行手に方つて紅の山の佇む悠然とした池の面を見た、此の水は美しい空と星影と紅葉の山とを黑く寫し出して强く私の心を躍らした、鏡の樣な水面を渡つて低音な笛の音が又も聞え出して壯快な調は私の姿へた神經を高く唆つた、高い雲の階段を昇つて行くと其處は見ゆる限り廣い花園で四邊に薫する崇い花の香に魂が醉つて行くかの如くで大勢の天使の麗しい翼が夜ながら仄かに見ねた麗しい笛の音は其處から洩れて來るので有る。

我木會山林學校

平田晩村

彌生參月筑摩の花煙霞の如きもの麗かなる春日の下に爛熳たるは之れ曾峽の一偉觀である。魑魅潛むかと思はるゝ松杉の樹立、其の間を飾る萬朶の花、最も俗氣なき高雅秀麗の境は花時の杭の原である、四方靑嶂に圍まれたる中に高樓巍然として聳つを山林校及寄宿舍自治寮となす。地は新開村寮生は呼んで神化村と言つて居る、若し最も調和せる觀望を求めんと、欲するならばそは春の小丸山のテーブルグランドと杭の原の二域を擧げねばならぬ。清新塵を止めざる花の精は山林校健兒の意氣である。ハイカラ氣取の多い近代の學生社會に小倉服に破帽敢て身幅を飾らず、高歌放吟に福鳥街頭を濶步して敢て憚からず、本邦唯一の校として森嚴のサムシングを感じて居る。當地出身の詩人嶋崎藤村は頃者歌ふて曰く

『劒の樣に稻妻のした晩、更けて外暗に山林校生徒の木會節を聞いた、淡柔を含まぬ荒い應揚な男性的な節だ、現代の輕薄な世の中を木會節で振はせ木會節で動かせ』と

現代の享樂主義の學生の夢にも知らぬ熱烈な調だ、現今の學生社會で最も美はしき詩的生活をなしつゝあるは杭の原の健男兒である、自治寮に立籠つて沼々奔馬の勢を以つて杭の原の岸を打つ浮華の思潮に、極力抵抗せる吾等二百の健兒の動作は皆悉く詩である、胸に漲る靑春の血潮の高鳴の時に於て雄々しくも長刀提げて陣頭に立つ吾等の行動を蠻的なりと評するものは未だ吾々の血潮の響を耳にせざるの輩である。諸君若し曾峽に遊び夜更けて新開村の我校の邊を歩するならば黑ずんだ寄宿舍の窓より燈火の流るゝ所、勇ましき寮歌の縹渺として漂ふをきく此時に於て吾々は俗を脫し醜を離れ一切無我の境に彷徨するのである、嗚呼若きに醉ふことの出來る吾人は眞に幸福

な人ではないか、『雲井に聳ゆる御嶽の麓、峡に通へる木曾路の邊、千秋變らぬ緑を込め朝日の光り輝く所の自治寮には大なるものが籠つて居る、松下村塾なる一小破屋よりして、天下の人才を生みし如く萬年床と木曾節の籠れる薄暗き自治寮の中の陋き室は將に自然征服者の冀北となつて居る、次に山林校の健兒の獨特たる木曾節の一節『山家の猿と笑はゝ笑へ花も散り來りや月もさす』と吾々は將に此意氣と抱負とを以つて專念英氣を養つて居る。所謂文明なるものゝ齎らす風潮は沼々として筑摩の里にも押寄せて ねる然し山林校の自治寮には押寄せて來ない渦中に居る他校の人は山林校の健兒を見て笑つて居るかも知れん然し外面を美飾せる生暖い風はこゝには吹かぬ然し乍ら芳はしき清き花の一片は散つて來る眞如の月は餘の樣な光をこゝに投げて居る。

林業家として渡鮮せんとする諸君に　（一）

星加正雄

朝鮮と云へば僕は今更懐かしく思ふのであるが大切な御大典記念號の林友を借りて右の如き題目に就いて諸君と暫らく語らうと思ふのであるが僕は文才と云ふ点に於ては至つて短い方であるから只思ふ儘を記述して聊か有志諸君の御參考に資せんとする考であるが或は何の參考にもならないかも知れんが兎に角應用の御量負を以て御愛讀下されん事を前以て希望して置く次第であります。

元來林業と云ふ者は陸上到る所に行はれる至つて平易な事業であらうと思ふのであるこで私の語らんとする所の朝鮮に於ける林業の前途は至つて有望であると思ふのであります、先づ朝鮮に行つて第一番に目に付くのは多くの山々であります、此の時に當つてどんな感じが起るであらうか或は不思議の念を抱かれるであらう、こは無理なら ん事で又誰れが見ても不思議の念は禁じ難いのである。

何故にかく不思議に感ずるのであるかと申せば此れに就いては種々雜多な原因もあるであろうが手早く云へば我が國に於ける林業の沿革を四期に分つとせば先づ第一期を終へて第二期の甚だしいものと云はなければならん即ち天與の美林を濫伐するのみにて一方殖林と　ふことに就いては少しもなす事をせずして只空しく放置したのが第一の原因であろうと思ひます、然し乍ら此のあはれな朝鮮も日韓併合以來我が國の施政する所となつてからは總督府に於ては專ら殖林に意を注ぎて頻りに此れが奬勵に努めつゝあるのであるがまだ〳〵至つて幼稚なもので朝鮮全土を隈なく見てもどこに殖林してあるのか盲目が手で物さぐるよりもまだ覺束ない事であろうと思ひます、此れを見ても如何に朝鮮は前途有望であるかと云ふ事は今更僕が語を改めて申す迄の事でなくより以上諸君の胸中に明らかに浮かんで來るであろう。

而して朝鮮は林業上如何なる造林法を以てせば最も適當であるかと云ふことは、これは僕の樣な愚かな者では論ずることが出來ないから、この問題ばかりは博士や學士諸賢の專門家に任せて置くとして今林業上森林帶を熱帶暖帶温帶寒帶の四帶に分つとせば朝鮮は其の温帶に相當し僅かに南鮮一部海岸に沿ひて少しの暖帶が有るのと、づつと北へ行つて鴨緑江の地方に於て又少しの寒帶林が有るのみであるから、此の一斑を見ても署朝鮮の氣候は如何に凌ぎ易きかは御わかりになるであろう、僕はまだ當地に來てから春に一度と夏に一度と秋の紅葉にもつい先頃遇ふた樣なわけで一般の事殊に氣候と云ふ点に於ては少しも知らないので先輩諸君の方は遙かに委しく御存じであろう而し最近の氣候をと申せば或は愚な僕の方は委しいかも知れん即ち木曾及び以北は北海道の札幌近邊迄は皆な林業上温帶であるから此れを朝鮮に比すれば即ち木曾以北北海道の札幌近傍迄は＝朝鮮大部分と云ふ樣にわけなく算術の公式を以て表はすことが出來るし又幾何的に北海道から鴨緑江迄でを一直線と見なして一点を朝鮮海峡に他の一点を長野縣として三等分するとせば一線の兩端は距離に於て相等し故に一端は温帶ならば從つて他の一端は此れに等しくなければならん即ち温帶は＝温帶に等し寔に此の事實は僕を疑ふの必要もなく最も明瞭に最も適切であろうと思ふ。

●此の儘云ふてしまへば折角の林業家にして渡鮮せんとする諸君にも至つて面白くないから又々次號々々で引き續きお目にかゝる事と致しましよう（未完）

和歌

新家園面

奉祝歌

すめがみのみことのまゝに高みくらわがれほぎみは高しらすらん
ことさへぐ外つ國人もあふぐらん世にたぐひなき今日のみのりを
すめらぎの御代よろづ代と民草がよばふひゃきにゆらぐあめつち
おほやしま岸うつなみももろごゑに君よろづ代とうたふ今日かな
みなみの海ねみしが島にすむ民もわがれほぎみの御代いはふらし
かしこかれどたやとたゝへて國民のいはふこゝろは君ぞしらさん
たほぎみのへにとちかひて御民われ仕へまつらんよろづ代までに
おほぎみの御代なが秋ときくの花をりてかざゝんちよのはゞめに

御大典奉祝

華村生

君が代の千代祝ふごと此秋を
　咲き出し菊の匂ひ床しき
高御座のぼらせ給ふすめらぎの
　今日のよき日を祝へもろびと
君が代を祝ひ壽く民草の
　こゑあめつちに響き渡りぬ

○落つる木の葉

黒川の谷間に竝ぶ色紅き
　楓にせまる秋のたりがれ
時くれば落つる木の葉にありぬれば
　紅葉をつよく吹くなあらしよ
霧深き野末に立てる桔梗花の
　ひらく力に露こぼれけり
紅葉散る淋しき秋のこの夕
　亡き友に似し人を見しかな
美くしき小鳥よ吾れはいや淋し
　吾がよる樹々に來て歌へかし
木曾山の紅葉の色のうすれゆきて
　一朝毎に散るぞ淋しき
吾が歌と小木曾の山の白膠木の葉
　霜に枯れしと何れが淋し
夕風にもろくも散りしコスモスの
　花にも似たる吾が思ひかな
肌寒く吹く秋風にサフランの
　わくら葉落ちて夕暮るゝかな

俳句雜題

横井正風

小狐の伏すにまかせし野菊哉
野風呂たく煙たなびく夜長哉
神迎ひ火の子交りの落葉かな
宮人の車はさりてしぐれかな
文燒いて殘る字をよむ夜長哉
親子して艫をこぐ沼や渡り鳥
初霜に素足つめたき廊下かな

日記帳より　華山樵夫

■御大典を祝して
君が代の替らぬ色やかざり松
■修學旅行の前後
大阪も京も夢見るこよひかな
■伊勢神宮に詣で
神の庭露もたふときひかり哉

通信

桑花子

冗語

在校生諸君！
私が當地に來てから最早六ヶ月になります其頃は當地はまだ梅の花や櫻の花や李の花などが一度に咲き揃つた時でありましたま

だ北向の日陰には雪が殘つてゐました早いものですねまた一ケ月も立てば雪が降るのですもの……其間短いながら私の新しい生活には小さな種々な變化が有りました又多少經驗する所もありました私は御承知の通り愚人でありますす愚人は愚人だけに廣い社會の浪風にもまれる事が外の人に比べて多い樣に感ずられます丁度軟い物が堅い石にでも投げつけられた樣に其凹みははるかに堅いものより多いので有ります、で私は此の間に感ずた事の二三を述べて近々社會に出られる諸君の參考に供したいと思ふのでありますけれども勿論愚人の言ふ事で或は取るに足らないかも知りませんが老婆心の存する所と御免しを願ひます。

禁酒主義の實行について

私は元來少しの酒は好きで有りました暑い夏の日が眞上から照りつける頃などは冷い一杯の酒が非常に戀しくありましたけれどある書物を見てから禁酒主義の實行と云ふことを深く決心しましたので社會に出た今日酒は一杯もやらない事にしたのです御承知か知りませんが當地は酒の釀造高に於ては日本第一との事で從つて何かにつけて酒を飲む機會が多いので有ります。

私は此の中に立つて禁酒主義の實行と云ふ事は非常につらく有りました『酒は社交上必要だ』とか『山役人は酒が飲めなければ』とか『飲む時は飲んでやるさ』など丶云ふ言葉は私の主義を多少枉げ樣としました此處が克己心の必要な所だと愚かながらも私の良心は呵責しましたやがて一ケ月過ぎ二ケ月過ぎ六ケ月の後の今日は他からのすゝめもなく自分も殆ど其の苦をのがれる事が出來ましたこゝで私は意志の貫徹と云ふ事の必要と貫徹する爲めに意志の固い事の必要をつくづく感ずました。

學生時代に見た社會について

學生時代は社會を種々と想像して見ましたりして歸する所はいつも社會は恐しいものだいつもにらみあへの樣なものだと思はれましたけれど出て見ればマンザラうう云ふものでもありません敵も有れば味方もありますす以前は確に恐しいものに相違なかつたのでありませうけれど上から下迄斯ふ云ふ事を理解して來た今日では餘りこうした事は感じられませんけれど學生時代はやはり社會は恐しい者だとして其れに對する用心が必要で有ります勿論恐怖病にかゝるのはいけませんが實力の素養が最も大切だと痛切に感じましたでなければ外部的よりも內部的に一種の不安がおきて來ますから

年長者と年少者について

私共の母校の樣に年齡の差の甚しい所ではこんな問題がしばしば思考されます勿論成績や從事する仕事などの關係も有りませうが同ト成績で同ト仕事に從事したとするならば確に年長者は年少者の及ぶ所では有りません殊に勞働者の監督などの場合は著しく違ふものだと感ずました此處私は諸君殊に年少者諸君に御願したい事が有ります或は六月林友御掲載の萍生君には御叱りをかふむるかも知れませんが今日の社會は實力ばかりの世の中ではないと思ひます其れは慥かに蘇門の卒業者にしては高農出實科出などと肩を竝べて恥しい樣な事はなかろうと思ひますが社會は其の實力を公然と認めて呉れません、で母校卒業後も尙進んで高等の敎育を受けられん事を望んでやまないので有ります單に資格と云ふのみでなく學べば學ぶほど益があつて損のない事は言ふには及びますまいけれど

經費について

經費、生活問題なども此れからたこる事であります農家は兎も角も私等の樣な小官吏は米の安い今日ではうでもないが少し變動でも有ると飢死するのは査公等についで吾々だと思ふと之も等閑にしておく問題ではないと思はれます先づ第一は食第二は衣第三は住の順序で私の樣に一飯六錢內外の食物を食つてゐるものでも月末の勘定には月給の半分は取られてしまふので有ります第二に衣之れも近頃の樣に寒くなつて來ると食以上にかゝります住之れは餘りかゝりませんがこんな事から算盤を取ると月給は殘りません唯旅費の幾分が殘るのみで有ます之として書物や雜誌でも買へば殘るものは

財布の底に味噌漬が二三枚きたない樣ではありますが實際の所私の今日の有樣を告白するとこんなものであります。

此處で又一考——老人ぶつた樣では有りますが——獨り身の今日は兎も角も妻や子供等の餘計なものの出來た將來はどうして生計が立つて行くか？となりますと前に述べた樣に高等の學問でも修める樣な必要が自然と湧いて來はしまいかと思はれますそうして私も再び母校を卒業した後其儘止まらずして更に何か一分別が必要だと云ふ事が腦中にきざまれました。

趣味の涵養について

母校卒業後多くの諸君は八里遠い山の中に入られる人が多いだろうと思はれます私も其一人でまるで井戸の底の樣な谷底や鬱陶しい五月雨の頃や此頃の樣に月の淸い晩など何もなす事もなくて徒らに空想したり故郷の事など思ふ時其の無聊さ寂しさは如何ばかりで有りませうこんな時に音樂なり文章なり繪畫なり其他の趣味を持つて居たならばどんなにか樂しくどんなにか心を慰める事だらうと思ひます私は元來無趣味な人間で有りますがしかし下手の橫づきで多少繪について趣味を持つて居りますでこんな事を感じて以來山に行く時でも內に居るときでも小さなスケッチブックを懷にして何か面白いと思つた物感興の湧いたものが有つた時は直ぐ寫しておきました例ひ其れが下手であつても其の時は勿論後の思出の種として心を慰めるに充分だと感じましたからです繪でなくとも音樂なり文章なり一つの趣味を持つ事は無益の事でないと思ひます。

悲觀と樂觀

『悲觀と樂觀』舊校舍時代の校友會席上でくちばしの黃い私がこんな題で赤い顏をして話した事が有ましたけれども其の大要は其中庸を行けと云ふのだつたと思ひます私は今も尙其心算で居りますが今日の世の人は樂觀者よりむしろ悲觀者の方が多い樣に見受られます其の中庸の人は兎も角も悲觀者と樂觀者とを比較して見ますと其の結果は悲觀者の方がよい樣に思はれます勿論華嚴の瀧や淺間山はよくないでせうけれど悲觀の內には奮發の動機が幾分か含まれて居ります爲めに悲觀の結果としての奮發の動機をうまく養つたならば其の悲觀をかへして樂觀とする事が出來るだらうと思はれますこれも空論かも知りませんが一寸終りにつけ加へて置きます。

勝手なつまらない事を書いて貴重な紙面を汚すのも本意で有りません其れよりは美しい諸君の文章や新らしく社會に出られた同窓諸兄の有益な經驗談でも澤山承りたいと思つてこれで擱筆します。

（十月二十日午秋田の山中にて）

學校記事

○赤星知事臨校　十月廿六日午前九時赤星知事は白上地方課長、安藤林務課長を隨へて臨校遍く校舍內を巡覽の後講堂に於て生徒の爲一場の訓辭を垂れ林業は仁者の業なれば甚だ尊むべく重んずべく諸子は斯學に入られし以上左顧右胯する事なく專念斯業に從事し其進步改良に向て全力を盡さざるべからざる旨を反覆說示せられ終て校長室に於ては職員の爲めに訓話をなし學校の事業以外地方林業の爲にも應分の指導開發を希望する由を陳べられ十時過退出せられたり

○御眞影奉迎　十月廿六日七宮校長は御眞影を奉戴すべく加藤書記を從へて縣廳に向ひしが翌廿七日午後六時の汽車にて福島驛に歸着せり是より先全校職員生徒は校旗を先に立て停車場前に整列して奉迎し校長は御眞影を捧げて車に乘り巡査部長先導し武裝せる生徒八名腕車の前後を警衛し七時無事着校、一同最敬禮の後御眞影室に納め奉れり當夜學校以外の者にして學校迄奉迎の列に加はり來りしものは巡査部長の他、松岡縣會議員、木戸新開村長等なりき

○御眞影拜戴式　十月廿八日午前九時より講堂に於て御眞影奉戴式を擧げ校長式辭に次ぎて君が代合唱あり、終りて職員生徒、十數名宛　御眞影を奉拜し了つて式を閉ぢ

たり

○觀楓遠足　十月卅日、職員生徒一同觀楓遠足を常盤橋附近に試み歸途は棧に出でゝ歸校せり紅葉は少しく過ぎたれど尙々見所あり紅葉と白雲と巉巖と碧流と其間に点綴せる山村の秋景とは日頃の俗懷を洗ふに充分なりき

○天長節拜賀式　十月卅一日午前九時講堂に於て擧行御眞影奉戴後始めての御式殊に近々御大禮を擧げさせらるゝを思ひて特に聖壽の無疆を祝し奉りぬ

觀楓會の記（一）

白露變じて霜と化し階前の蕉影風に亂れて秋は漸く闌けんとす鑾路の山河は目に入る限り錦繡を織り出して遊子が杖を待つ事甚だ切也

吾校五百の健兒に依りて催されたる觀楓の集は菊薫る三十日の朝歩を行人橋に起して常盤橋方面に試みられき

此日空は晴れて飽くまで澄みし秋の氣に吾等が行を迎ふるが如し

木曾川に沿ひて坂路を進めば標柱淋しく立てる追分に至る道を王瀧道にとりて左折し木曾の流を左に棄てゝ進む

路を擁して登山者の爲に設けられたる茶店あり御嶽登山の圖の色濃きが眼に殘りぬ

駄菓子の箱雜然たる中に老媼一人雞犬を友とせる峠の茶屋の光景を記憶に問ひぬ

民家漸く疎にして路は漸くに上下す路々點々として梢に赤き柿の美しきが吾等が渴望の的となる柿樹立てる所必ず素々たる民家を配す

漸くに進めば人夫營々として路に作業せる所に至る此れ王瀧に通ずる新道路にして已に成りし所は坦々人車を通ずべし

王瀧川の水は飽くまで澄みて油の如く緩やかに流る、既にして常盤橋に着す時に十一時十五分！

里余の山路に食は大に進みて握飯の美味大牢に異らず水晶の滴こぼれて流れけん王瀧川によどんで紺碧の淵をなし四圍に赤々と燃へたる紅葉の影を浮べてジエリエットが紅き血潮を染めたるかとは疑る（K生）

觀楓會の記（二）

常盤橋より山の麓に沿うて行くこと數十町にして御嶽三笠八海山の諸神社を合祀せる山の中腹に着しぬ此處より山下を俯瞰すれば一簇の錦雲深溪にわき其の疎らなる間よりは急湍の白きが目立ちて見ゆ西には日本アルプスの連山を從へて御嶽の峰雪玲瓏として千古の秀色掬すべく實に其の壯大なる景色譬へんにものなし

あたりは山又山の綾錦濃きうすき取り交へたる中に松の二本の綠いやまされるやうに生ひ出でし又一入の眺めなりき

山の秋風日毎に寒く迎ふ人さへいと稀なる山道を辿り行く事十數町にして朝霧に名を得たる棧に着しぬこのあたり最早稻色づき農人の刈入れにいとゝいとがはしき中に豐年を祝ひて歡喜と滿足とにみてり

橋のたもとに大なる楓樹あり秋風訪れて一葉二葉翩々として散る彼方の森よりは名もしらぬ小鳥の鳴聲かすかに聞ゆて秋林更に寂々たり

一人の友の汀に下り行きて岩にせかれて流れ行く紅葉ながら流れをむすびつゝ『渡らばにしき中やたへなん』など小聲にうち詠ずたるも面白し

奥深く尋ね行きもせば意に適したる幽境もあらんされど釣瓶落してふ秋の日脚なれば草鞋踏みしめて二百の健兒くもの子を散らすが如く山又山紅葉黃葉の間を黑うなりて母校の方へと急ぐ。（正風生）

會員消息

○代田文之助君は、石川縣羽咋郡末森村林業教師として赴任せり

○野村光智君は、北海道膽振國早來驛合名會社藤田組北海道林業出張所に轉任

○代田文之助君は、廣島縣西條小林區に赴任

大正四年十一月廿三日印刷
大正四年十一月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫

長野市西後町丙二十一番地
印刷者　田中彌助

長野市西后町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部

長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　蘆澤書店